

論文要旨

令和元年度 博士学位請求論文要旨

近現代日本における日蓮信仰の研究

三輪 是法

本研究は日蓮聖人と法華経との関係、日蓮聖人がどのように法華経を読んだのか、という問題に始まる。端的に言えば、日蓮聖人は法華経を明鏡、仏の未来記として読んだということである。これを宗教学的視点・心理学的視点に基づいて換言すると、法華経の中に身を投じる、法華経の世界を現実として生きるということ、自らの人生を法華経という物語（narrative）によって意味づけるということができる。

では、日蓮聖人を信仰する人々にとって、法華経、あるいは日蓮仏教は物語たり得るのか。この問題を考察するためには、日蓮仏教を信仰する人々——出家した弟子たちではなく、在家信者たち——の言説が確認できる資料が必要である。そこで、信仰者の言表が最も多く存在する近現代日本に焦点を当て、日蓮仏教（法華経と日蓮遺文）が信仰者に及ぼす精神的・心理的影響について考察する。近代日本に焦点を当てたもう一つの理由は、明治以降、日蓮仏教系の新宗教が数多く興ったからである。つまり、なぜ日蓮仏教はこれほどまでに近現代の人々を引きつけるのか、その理由を明確化しようとするものである。

まず第一章では近代初頭の日蓮信仰者であり、在家教団である本門佛立宗を立ち上げた人物、長松日扇（一八一七～一八九〇）の信仰を考察した。日扇自らが回想し法難期と名づけるように、三十二歳の出家から五十九歳までの間に、周囲からの讒言が原因で転居が繰り返されており、日蓮聖人との同一化を意識することによって、負の要因を法悦と自覚へと深化させた。日扇の苦難が現証としてあり、それを法華経と日蓮聖人、さらには門祖・日隆の言説という文証によって相互媒介的に真実として証明していく。また、講衆が体験する数多くの病氣治しという靈驗も現証としてあり、こうした靈驗談によって日扇は元より、講衆も信仰の正当性が疑いないものとして強化されている。つまり、強化された日蓮信仰が「物語」として共有され、講の組織を堅固なものにしていく一方で、日扇の信仰も不退転となり、外に対して熾烈な折伏布教として実践されていく。

第二章では、近代において多くの事跡を残した日蓮仏教界の巨人、田中智学（一八六一～一九三九）の日蓮信仰について考察を行った。智学は、現在「国柱会」として日蓮仏教を体現している宗教団体の創始者であり、本研究の考察対象である高山樗牛や姉崎正治、石原完爾、宮澤賢治、妹尾義郎といった人物に直接的、あるいは間接的影響を与えた宗教界のカリスマである。智学は、一旦は出家したものの、父親から受けた法華信仰に基づいて、在家の「一個の信者」として日蓮仏教の理念の元で社会的救済活動していった。出家した理由は、日蓮宗教団内で共有化していた摂受という布教方法を正当化することに疑問を持ったためであった。智学は、日蓮聖人に回帰

することによって近代日本における日蓮仏教のあり方を思索し、折伏という布教を行動化していったのである。

第三章では、田中智学と交流をもち、文学者として日蓮聖人に傾倒し、わずか三十一歳という若さでこの世を去った高山樗牛と、樗牛と深い親交を持つ宗教学者・姉崎正治（一八七三～一九四九）について、さらに時代は下るが歴史学者・上原専祿（一八九九～一九七五）について考察した。

樗牛の場合、家族関係や、経済的・身体的にコンプレックスに苛まれていたことが日蓮信仰に大きく関わりを持つことになる。特に、将来を有望視されていた矢先に病いに倒れたことは、大きな失望をもたらした。こうした状況で、日蓮聖人に出会い、信仰していくことによって日蓮研究を生きる糧とした。それは、樗牛の人生を肯定的に意味づけ、コンプレックスを超克するための日蓮信仰である。

姉崎は親友・高山樗牛の日蓮研究に影響を受け、否定的だった日蓮観を、樗牛の日蓮研究の遺稿や日蓮遺文を直接読むことによって、日蓮聖人に魅了されていった。ハーバード大学時代に『法華経の行者日蓮』を出版したことは、姉崎の日蓮信仰が確固たるものになったことを象徴している。その信仰は、姉崎自身が樗牛の日蓮信仰を分析した結論と同様、日蓮聖人が姉崎の身体に入り、一体化するという精神的に深化したものだ。

上原は一橋大学第五代学長を勤めた人物である。上原が影響を受けた日蓮信仰は、養父母が信仰していた国柱会の信仰による。幼年期から法華経と日蓮遺文に浸る毎日で、上原は日常的に日蓮仏教に対する信仰心を体得していった。上原は大学人として、苦悩や、さまざまな屈辱と挫折を味わい、日蓮聖人の言葉が癒やしの意味づけとして機能した。晩年、妻の死によって上原の信仰は内面に沈静し、やがて死者が生き続ける責任が生者にあることを覚知し、釈尊と日蓮聖人を自らの生命力にしていった。

第四章では軍人である佐藤鐵太郎（一八六六～一九四二）と石原莞爾（一八八九～一九四九）、さらに若き軍人を突き動かし、二・二六事件のクーデターの首謀者として死刑となった北一輝（一八八三～一九三七）の三人について確認した。

佐藤の日蓮信仰は、自らの国防論が法華経と日蓮聖人の安国思想によって正当であることを確信し、その信仰を深化させるとともに、戦争における国防の姿勢を強めていった。私生活では、娘の死に直面した経験から、信仰を深めている。軍人としての佐藤は冷静沈着、主知的印象が強く、日蓮仏教を信仰するようには感じられないが、死や生命については霊的・超越的に考えていた。佐藤の信仰は、倫理的側面が強いが、その根底には人間としての日蓮聖人を崇拝し、日蓮聖人への恋慕があった。

石原の日蓮信仰は、田中智学の国柱会に始まる。多読を習慣化していた石原は、田中智学の著書を読みあさる。石原も日蓮聖人のことばを規範的に受け止めていたが、佐藤とは異なり、折伏によって世界統一を実現しようとした。私的生活においては、妻との関係に日蓮信仰があり、日本国に共に尽力する同士として生きるという禁欲的關係を持続させた。石原の人生は、まさに日蓮仏教を倫理規範とする日々だったといえる。

北は二・二六事件の首魁として陸軍兵士たちに大きな影響を与え、辛亥革命に参画するなど、国際的混乱期に社会改革運動に関与してきた人物である。北の日蓮信仰は、革命思想とその動向に確認できる。辛亥革命の頃から法華經の信仰を深め、幼年期から強かった靈感と一致して、精神的に日蓮聖人と深く繋がった。すなわち、北は日蓮信仰によって、自らの革命思想を正当化し、日蓮聖人の立正安国論を規範として革命を実行へと移していった。

第五章では教育者として牧口常三郎（一八七一～一九四四）と戸田城聖（一九〇〇～一九五八）、さらに宮沢賢治（一八九六～一九三三）と妹尾義郎（一八八九～一九六一）の社会運動家の日蓮信仰を確認した。牧口と戸田は、現・創価学会の初代と第二代会長である。

牧口にとって法華經と日蓮遺文は、教育改革を推進させる力となり、自らの教育論の正当性を理論づけ、更に自らの生涯を意味づける作用を持っていた。

一方、戸田にとって日蓮仏教は、創価学会と名を変えて教団を維持させる規範であり、自らの人生においては負の出来事を正へと転換する物語であった。戸田の経験は現証として日蓮仏教に位置づけられ、法華經と日蓮遺文の理証と文証によって相互に真実性を証明することで、会員を導き、自身の信仰を深めるといふ信仰の連鎖を引き起こした。

賢治の日蓮信仰は、父親との確執、不甲斐ない自分との戦いを契機とする。賢治十六歳の時、法華經と出会うが、まさに心身共に窮地に追いやられていたときであった。すなわち、負の要因を転換せしめる物語を得て日蓮信仰に入り、父親へのコンプレックスも克服したのである。妹の死に対しては、賢治自らが詩や物語を紡ぎ出すことによって克服していったと考えられる。

妹尾の日蓮信仰も、賢治同様、うち続く不幸によって深まっていた。妹尾は、母の死、病との格闘、兄弟の不孝という、負の事件が続く中で、日蓮信仰を堅固なものとし、出家する。負の出来事の意味づけは日蓮仏教に基づき、妹尾家が謗法の罪を犯しているという自覚に至り、家族の回心に努めるようになる。妹尾の信仰が深化する原因はもう一つ、題目修行の効果によって健康な身体が戻ったことも理由としてあり、現証を得た妹尾は不退転の意志で新興仏教青年同盟へと改革運動を行動化していく。

第六章では、法華經に説かれる久遠の解釈を天台大師智顛と日蓮聖人に確認し、さらに近代日本における信仰者が、久遠という時間の中で生命をどのように捉えたのかを考察した。田中・佐藤・戸田の久遠の生命論は、死を積極的に認めた上で生の尊厳を問うのか、靈的存在として生を継続させるのか、それとも宇宙的大きな何かと同一としてみるのか、というもので、そこには、生命に関する倫理的問題について、日蓮仏教によって答えを見いだす可能性が示されている。

以上、近現代における日蓮信仰についてまとめると、信仰者にとって日蓮仏教は癒やしの意味づけと規範的意味づけの二つの宗教的・心理学的救済作用を持っていた。それは個の価値を高めて行動へ促し、延いては日本の世界内存在の意識を確立させたと考えられる。また、日蓮仏教系の新宗教が広がる要因として三証一致があり、信仰者が経験する現証が法華經と日蓮遺文の正当性を証明し、翻って経験が法華經と日蓮遺文によって意味づけられるという関係に基づいていることが理解できるのである。